

書義概要

- ・不思議の国のアリス (リス・キャロル, 矢川澄子 訳)
- ・そっちは全文ちゃんと読んだことなかったんだよね。

×モ

- ・文体があまりに独特。これは訳の問題?
- ・() 書きが多い、かといってスルーしてもいけない。
- ・詩?

感想

とにかく「フフフした」というのが第一の感想だ。

まずあまりにも独特の文体が理解を妨げている。注釈を文中に大量に織り込むスタイルもそうだし、この訳限定なのかもしれないが地の文はアリスの一人称視点なのに対してかわな木しい三人称なのかも区別しづらい所がある。あまり必然性もなく詩が挟まれたりするのも、文章としてはしつものにくさが強い。

このあたり、児童書としてはかなり読書体験のように思えるが、やはり元々が口本の童話だったことが影響しているのだろうか。訳では十全に再現されているとはいえないのだから、明らかに韻を踏んでいたり、どこにかそう訳そうとして諦めた痕跡もいくらか見られる。

話自体の感想としてはもうあえて語ることもないのだが、ディズニーの劇場版アニメではカットされている挿話などもあり、単純にそれ自体の新鮮さと、その割にもやはり「論理演算的な」話の組み立てがされており、むしろじなわではいかぬ作^りた^らと思った。

今度は別の訳者の文で読み直してみたい。